比叡山シンポジウム「現代社会における宗教の役割」（2018 年 4 月 22 日）

基調講演
長尾　真先生
『心の時代』

本稿は当日の講演をテープ起こししたものに若干の修正を加えたものです。文中に出てくる数字（1．や①）は当日配布のレジュメの該当する個所を表しています。

お手元に「心の時代」というレジュメを用意させていただきました。これに沿って話をさせていただきます。

私は科学技術分野の人間でございまして、文化や宗教というものについては専門では御座いませんが、子供のころから常々考えてきました宗教というものについての考えも少し入れながらお話をしたいと存じます。

レジュメの1．に書きましたように、現在は全く科学技術の時代ですけれども、18 世紀から 20 世紀ぐらいの間は、科学万能の時代であったと考えられます。科学というのは何かというと、外界世界、自分の外の世界を客観的に眺めて、それを分析して理解するということで、そういう時代がずっと続いてきました。20 世紀におきまして、生命科学という分野が開拓され、DNA、遺伝子というものが発見された結果、科学の色々な分野においてほとんど原理的なことが分かった。こうして科学は峠を迎えたのではないかと考えております。それは 20 世紀の後半ごろです。

科学に対して、工学というのがあります。工学というのは何かといいますと、分析された科学の力を借りて、合成、物を作りだしていく、そのようなことをやるのが工学です。例えば 17世紀から 18世紀の終わりころにかけて原理がわかってきた機械の技術というようなものは機械工学としてずいぶん発展しました。建築もそうですし、19 世紀には化学、ケミカルエンジニアリングというのもが非常に発達しました。そして 20 世紀には原子力、そして遺伝子工学というものになってきているという意味で、20 世紀は分析から生成の時代へと変わってきつつあるというのが科学技術の時代の変遷であると考えられます。

2．ですが、そういうことでいろんなものが作り出されてきました結果、19 世紀から 20 世紀には、いわゆる人間にとっての、あるいは社会にとっての負の遺産がものすごく蓄積されてしまいました。例えば環境問題がその典型的なものであると思いますけれ

ども、そういうものが蓄積されてしまって、その後始末をどうしたらいいかというのが大きな問題です。3.11 で原子炉が爆発してしまった後始末というのもそれであります。科学技術というのは良いこともずいぶんしたのですけれども、悪いことも沢山したということで、21 世紀はそういう負の遺産を償う時代であると位置付ける必要があると思っております。②に書きましたように、地球環境の回復というものが喫緊の課題になっているということです。

③と④ですが、人間は資源を食い尽くすことを随分やってきた。石油資源をはじめいろいろな資源を費やしてきた。それから水でもきれいな水というのはどんどん減ってきている。こういうことがあるわけです。弱肉強食といいますが、そういう時代になってきている訳ですから、相互協調的で平和的共存の推進ということを積極的にやっていかないと世界中が滅茶苦茶になっていくと考えられます。

⑤と⑥です。20 世紀までは科学技術というものをどんどん発展させていくことによって社会は進歩発展していくという概念によって支えられてきたわけです。しかし、これからはそうでなくて、有限の資源を食い尽くさないで済ませられるような社会にしないと地球が亡びてしまう。そういう時代になってきているということで、進歩発展という 20 世紀までの基本的な概念を捨て去る必要があるということになります。

⑦に書きましたように、金儲け、いわゆる資本主義、そういうものがのさばっているわけですけれども、そうではなくて、もっと人間性が豊かでゆったりとした人生を送っていけるような社会にしないといけないということであります。それともう一つは科学というのは分析をするわけでありまして、要素還元的手法によって物事を理解しているということなのですけれども、⑧に書きましたように、そうじゃなくて全体を全体として把握するような、いわば東洋的手法といいますか、そういう考え方でやらないといけない。西洋社会におけるこれまでの科学技術の概念というのは、物事をバラバラにして、それぞれを理解したら全体が理解できたというふうに考えていたわけですが、そうじゃなくて、部分部分はものすごくいろんな複雑な関係で結ばれている。人間の体が全くそうなんですが、だから全体を全体としてどうしたら把握できるかという方向に科学技術も転換していかなればいけない。西洋医学でなくて東洋医学のような立場をもっと強調していく。そういう形で研究を進めないといけない時代になってきているのであります。

次に3. ですが、特に西洋世界の歴史を考えてみますと、「知・情・意」という形で時代が変わってきている。古代ギリシャの時代は知の時代でありました。知識というものが中心になった時代である。それに対して中世のキリスト教時代というのは、情、こころ

というものが中心になる時代であった。ルネッサンスからフランス革命の時代というのは人間の意欲の時代、欲望の時代、そういうものであった。そしてルネッサンス、フランス革命を経まして、再び科学技術中心の知の時代、知識万能の時代になってきた。その結果、科学技術の進歩によって、原子や生命とかいったものまでほとんどの分野の原理・原則が分かって来た。ただ、脳科学、ブレインサイエンスだけが分からずにまだ残っているということがあるわけですけれども、それ以外はほとんど基本的に分かってきて、いわば知の時代が終わりに近づいている。

ではこれからは何であろうかといいますと、③に書きましたように知・情・意の繰り返しという意味においては、知の時代から情の時代に変転していくことになるのではないか、こういうことを予感させられるわけであります。つまり21世紀は心の時代に移っていく。現在はその過渡期である。21 世紀の後半になりましたら心の時代が強くなっていくのではないか。ただ、西洋中世のキリスト教社会のような情の時代、心の時代とまた違った形の心の時代が出てくるであろう。それがどういうものであるかということについて我々はもっとよく考えないといけないと思っております。

4. は科学と宗教の接点ということです。宗教というのは信仰、心からそれを信じるということ、宗教心を持って人々が生きていくということであります。したがって心の在り方というものが非常に大事だということになります。宗教というのは必然的にそういうことに関わっているわけでありまして、心というのはどういうものであるかということを深く極めていくことが必要になるわけであります。心というものは、自我というものとどのように関係するか。心は外界世界を認識する根本、中心にあるものでありますから、心が宇宙や世界全体をどういうふうに理解しているか、あるいは理解すべきかということを考えねばなりません。したがって宗教は世界というものをどういうふうに認識し、そして自分というものをどのように認識し、位置づけるかということを考える必要があります。

西洋世界はキリスト教という一神教の世界でありますけれども、その一神教はどういう形になっているかというと、神というものを前提としまして、神が世界を作った、その中で人間も作られているということで、神と人間との関係をどのように考えるかということが大事な中心課題であるわけであります。キリスト教であるとか、ユダヤ教であるとか、そういうものにおきましては、神と人間との関係、特にキリスト教においては人間は神との契約によって存在している。だから人間は神との契約によって神の教えることをきちっと守ってやっていかなければならない。契約に違反することは許されない。そういう形で考えてきているわけであります。

では仏教はどうかということになりますが、仏教は神というものの存在を考えていない。仏教というのはあくまでも人は世界においてどういうふうに生きていくべきかを考えるものである。それは心の正しい在り方を追求していく宗教であると考えても良いのではないかと思っております。

②の最後のところですが、人間の心をきちっと正しく持つということを考える場合に、余計なものというのは必要のないものであるから、余計なものを削り落としていくということに尽きるというか、そういうことを徹底的にやっていったときに人間の心というものはどういう状態になるかということです。それは空の心、空の状態、あるいは無の状態というものと考えられるわけです。ですから、仏教を信じ鍛錬しておられる方々は座禅をするとかそういうことによっていろんな物事を削ぎ落し、心を無にするよう努力しておられます。心を無にするということはどういうことかというと、何もしないということではなくて、心を空しくすることによって世界全体がなんの偏見もなく非常に透明に眺められる。客観的に眺められる。そしてそこからしなければならないことが必然的に見えてくる。そういう悟りの境地になるのが空の世界であると考えてもいいのかと思っております。そういう状態に鍛錬をすることによって悟りに近づいていくということが、仏教におけるある意味での理想ではないかと考えられます。

③ですが、そういったときに、人間の心において、人も宇宙も含めて、外界世界がどのように見えるかということになるわけであります。人間の頭脳はどういう構造になっているかというと、まずは知識、つまり理屈で分かる知識のレベルがあって、頭の中のそれより深いところには、知識をどういう意味において捉えているかという意味の世界というのが存在する。その意味の世界を支えているものは何かというと、無意識の世界である。その無意識の世界は何によって支えられているかというと、人間という生物を全体的に成立させている魂といったもの、つまり人間を根本において支えているエネルギーの発路の元になるようなところのものがあるのではないか。だからこの魂から無意識の世界、そして意識の世界、意味の世界、そして知識の世界という、重層性を持った形で人間の頭脳は働いているというふうに考えてもいいんじゃないか。

そうしたときに魂の世界とは何かというと、これは先ほど申しました空の世界というものにアナロジカルに非常に近いのではないか。魂の世界というのはあらゆる可能性を秘めているものである。つまり自分がどういう人生を生きていこうとするかに関する根本的な原動力というのは魂にあると考えてもいいんじゃないか。知識とか意味とか、そして無意識とかいうものに関しては、自然科学の世界で相当研究されてきておりますが、魂の世界はまだまだ科学技術によっては探究されていないんですけれども、少なくとも無意識の世界というところまでは生理学的、医学的にかなり分かってきている。

しかしそれを支えている魂というものは何かということについては、まだ自然科学は全く分かっていない。宗教は言葉にはできないが鍛錬によって直接的にそれに迫ろうとしているのではないでしょうか。

いずれにしても、そういう生物の活動の一番底にある魂というのは無限の世界を秘めている。そこから無限の可能性が現れてくる。そういうことではないか。だからそういう根本世界というのをマスターすると言いますか、身につけると言いますか、自覚すると言いますか、そういうものがいわば悟りの境地であるということになるのではないかと思います。

④ですけれども、科学は宇宙全体をどのように物理学的に理解するかということを一生懸命やってきまして、ビッグバン宇宙というモデルを考え出したわけです。ビッグバン宇宙というのがどういうものなのかということは皆さん方もご存じかと思いますが、このビッグバン宇宙は何かから宇宙のもとが出来て、138 億年ほど前に爆発的に拡大して、それが 130 数億年たって現在のような状態で全宇宙が存在することになったというわけです。自然科学では宇宙をそのように分析的に解釈し理解しているわけであります。そうした場合に、そのビッグバンの元になったものは何か。ほんの一点に集中しているわけですけれども、138 億年前のそれが何であるかということは自然科学でも分かっていない。なぜそういうものがあって爆発したかということも分かっていない。この原初の状態が仏教における空の状態と非常に似た関係にあると考えてもよいのではないか。人間の頭脳の中における空の世界と、それから発展してきて現在の人間頭脳の知識構造が作られてきていることと、宇宙がビッグバンの直前にどういう形であったか分からないけれども、そういうものがあって、今日まで 138 億年経ってこういう全宇宙になっているということはアナロジーのような関係にあるのではないかと思っております。そういう意味において、特に仏教とこの自然科学的なものの考え方というのは、非常に荒っぽい類似ですけれども、似たようなことになっている。似たような思想的な経緯を辿っていると考えてもいいのではないかと思います。これは⑥に書いておいたことで御座います。

例えば⑦に書いておりますように、道元禅師はそういったこともはっきり自覚して言っておられます。道元禅師は日本最初の哲学者と言われている方でありまして、非常に深い思想を持っておられて、私なんかには難しすぎてなかなか分かりませんけれども、例えば過去の一切は現在の世界に現象している、つまり大昔からのいろんなことが現在の時点にすべてが展開されている、だから現在世界というものを徹底的に理解することによって、人間、あるいは生命、生物、そういうものの原点まで分かる、そういう悟りの世界があるんだということを仰っているのではないかと思います。空の世界

から今日が出てきているということについて、いみじくも自然科学において辿ってきたビッグバンモデルと似たようなモデルを考えられたのではないか。そういう意味において、⑧にありますように、科学と宗教はこのような形で窮極のところで同じ点に至るということにもなりうるのではないか。ゴリ押しの屁理屈かもしれませんけれども、そう考えてもいいんじゃないかと思います。つまり抽象的に深く考えられたことと、科学的、実証的に突き詰めていったこととの間に非常な類似性がある、科学だけが真実を語るものではなく、深い思想も真実を語っているということです。

5．ですけれども、そういった中で、人間の在り様、人間というのは一体どういうものなのだろうかということがあるわけです。まず①にありますように、人間は迷っている、迷うのが人間だ、あるいは悩むことは避けられないことであるし、悩むということが、かえって人間をしっかりしたものに作っていく原動力になるわけであります。科学的にそれを徹底的に原因究明していくことによって悩みをなくしていく。だから自然科学の世界というのは悩むということに関して、心理学的、あるいは認知科学的にいろいろと調べることによって悩みをなくす方法を研究してきて、今日かなり発展してきているわけであります。それを宗教の世界では、もう何百年も前にちゃんとその理屈を考え、それを個人だけでなく社会において実践するという社会活動もやって今日まで来ているということなので、宗教あるいは人間の考えというのは非常に鋭いというか、真実とは何かについて深く考えてきたのであります。それを我々は 19 世紀から今日までの間、科学技術的になんとか証明をし、そしてそれを実践していこうと努力しているのですけれども、宗教のようには参らないという状況にあるのではないかと考えております。

①に書いておきましたけれども、仏教にしろ、キリスト教にしろ、いろんな宗教には教義というものがあって、それを信じまた実践することによって、究極の世界、つまり悟りの世界に行き着こうと努力するわけでありますけれども、それでは神道はどういうものであるか。神道というのは教義のない宗教であると言われていますが、教義のない宗教というのは宗教ではないと欧米の人たちは言います。しかし決してそうではなくて、そういう形の宗教も十分ありうる。教義のない宗教というのは一体どういうものであるかということを屁理屈的に言いますと、例えばビッグバンの直前の宇宙というのは何があったか分からないけれども、ビッグバンによって宇宙が展開し始めて今日に至っているということを考えると、類比的にいえば教義のある宗教というのは何も分からないところから理性的に教義というものを作りあげた、神がつくり上げた、あるいは人間が神からの示唆によって作り上げたということかもしれませんけれども、世界の始まり、つまり空の世界から時間を経てビッグバンに相当する時になって教義が作られたと考えてもいいわけです。そういう意味では、屁理屈的に言いますと、神道というというのは教義が作られる前の世界である。荒っぽく言いますと、非常に単純な世界、あるい

はすべてが空である、世の中の始まりが神道として今日まで続いてきていると考えてもいいのではないか。私は神道の人間ですのでちょっと弁護するような言い方で恐縮ですけれども、神道の神はあるのですけれども、いわゆる一神教とか仏教のような教義がない宗教、つまり一神教以前の、心が空である無念無想ということが理想とされるような、そういう宗教が神道の本質ではないかと勝手に思っているわけであります。

②に移りますけれども、人間というのはやはり動物でありますから、恐怖心を持つと共に、あくなき好奇心、あくなき欲望を実現する意志をどうしても持たざるをえない。これは生物として避けられないことでありますけれども、それを何とかコントロールしなければ、人間社会、あるいは地球社会というのが滅びていくというのが現在はっきり見えていることであります。そういったことでありますので、④にありますように、宗教的な立場の人、あるいは自然科学であるとか、心理学的な立場でやっている人たち、いずれにおきましても究極的には死というものや未知の物事の内容を知るということによって、好奇心を満たしたり、あるいは人間の悩みを解消したり、安心立命の境地を実現したいという憧れを持ちながら、色々宗教活動をしたり、科学の研究をしたりしているに違いないのであります。そのやり方は違うけれども、究極の目標は同じではないかと考えられます。つまり、宇宙とは何かということを頭で理解し、心で納得し、そしてそういうものを安心して受け入れる。そして心を安らかにして死んでいく、こういうことになるわけです。そういうことでありますので、④に書きましたように、目標に向かって進んでいく道は違うが目標は同じところではないか。例えば富士山に登るのに、こっちから登ったり、あっちから登ったり、あるいは現代科学技術でいえばヘリコプターで富士山の頂上に降りるというのと、リュックを背負ってこつこつ一合目から富士山のてっぺんまで登るのと、道は違うけれど、目指しているところは同じようなところであるという関係にあると言ってもいいのではないかと思います。

そこで6．ですけれども、究極的なものへの科学技術的アプローチと宗教的アプローチはどうなっているのか。今言いましたように、一見ずいぶん違う訳であります。それをもう少し分析的に言いますと。科学技術というのはあることの理由は何だ、なぜこうなんだと、「なぜ」という質問を発する。それが分かったら、その分かった理由はまたなぜだと問う。例えば、津波は地震によって起きる。では地震はなぜ起こるんだというように、質問を繰り返していくわけです。そういうことをやることによって、原子という微細な世界や陽子、中性子とか、もっと細かい素粒子という世界まで科学技術はきているわけですけれども、そこから先もなぜかということを追求している。しかし、どうしても究極のところには行きつかない。だからどこかのところで諦めて、これは間違っていないだろう、これが真実であるということであれば、今の世界はこうなんだという理屈を立てるのが科学であります。だから、分析を続けていったところで、結局どこかで「信

じる、仮定する」ことになるわけです。

それに対して宗教というのは、直感的にこれは正しいと信じる。信じるレベルは違うかもしれないけれども教義にあることを信じるということをやっている。つまり科学技術においても宗教においても、レベルは違うけれども信じるということをやっているということになります。その例として人間はなぜ死ぬんだということを考える。科学技術的にはそれを人間の老化作用など色々な形で調べ研究しているが、なぜ人は永久に生きられないかということは分からない。そういう分析的なことをやりながらいろんな理由をつけて理解したと思っているのが科学技術なんです。じゃあ宗教の世界ではどのようになっているかというと、それはもう最初から人は死ぬものであると直感的に知っている。なぜかとは問わない。問わないけれども、人が死ぬということについて、それを信じているし、それが事実であると考えている。そういう差があるということになります。自然科学においては分析はするけれども、分析を続けていった究極の果てにはどこかで信じるということを入れざるを得ないという意味においては、直感的に信じているというものと、深さは違えども同じようなことをやっていることになるんではないかと、このように考えます。

さて、ちょっと話題を変えまして、7．に書きましたように世界にはいろんな宗教が御座いますが、宗教というのはどういうふうに発生したか。これは私の推量で科学的に証明されてはいないんですけれども、何千年も昔、人類が地球上に展開した時点においては、自然災害であるとか未知のことがいっぱいあって、そういう現象に対する恐怖心からそれを神の行為というような形で考えて、神を恐れ罰せられないように拝むという形で宗教が出てきたのではないか。だから、初期の頃は雷の神様であるとか稲作を豊作にしてもらう神様であるとか、いろんな神様がいた。これは世界中のどの民族においてもそうだったに違いないわけであります。しかし、例えば②に書きましたように、古代エジプト、オリエント地域においては、砂漠という不毛の地において人類はずいぶん生存に苦労した。そして農業という定着社会でなく動物を捕まえて食べるという狩猟の時代がありました。そういう狩猟をする人たちは、独立心が強いというか、自尊心が強いというか、俗な言葉でいえば我が強いというか、そういうふうに人間が自然という環境から育てられてこざるを得なかった。つまり不毛の地で生存していこうとすれば、自我をしっかり持って戦闘的にやっていかないと生き残っていけないということがあったわけでして、そういう人達を一つの民族として団結させるためには、強い形の一神教というものを作って束ねざるを得ない。そういうことがあったのではないかと私は考えているのであります。つまり一神教の神というのはオールマイティであって、人々はそのもとにおいて不服従じゃいけないわけであって、神の言うことを聞くという形で民族の団結を保って生存してきたということになるのではないか。だから、神と民

族、あるいは神と人間との契約によって神の下す規律を守らせるという非常にきつい束縛の世界を作り上げてきたわけです。

それに対して、古代オリエントから東の方、例えばインドであるとか、インドネシアであるとか、中国であるとか、ベトナムであるとか、あるいは日本までの、西から東へ視野を移してくると、雨が多い地域となり、照葉樹林文化で、農耕が中心になってきております。そういうところでは狩猟民族とは違い定着型で人々は協力して農業を営み、民族を律するような一神教は必要でなく、昔からの多神教を保存しているということができるでしょう。例えば、インドのヒンズー教はそういう意味で多神教の典型的なものであります。日本は恵まれた自然の中で過ごしてきて民族的に激変はなく、日本の神というのは原初のままの多神教であります。村の人たちは穏やかにお互いに協力して農業社会を形成して生存していくという世界です。日本においては台風が来るとか、火山が爆発するとか、津波が来るとか、色々天災は沢山あるわけですが、本質的には農業をすることによって穏やかな生活をしてきた。そういう世界においては、ヨーロッパの一神教のようなものは全く必要がないというか、自然そのものを崇めることによって生存をしていくことが出来るという、そういう社会に大昔からなっていた。それが今日まで来ていると言ってもいいんじゃないかと思います。

仏教というのはじゃあどういうことであるかというわけですが、これは比叡山に来ておられる方々は、わたくし以上に仏教の本質をご存知と思いますけれども、ブッダが王子であったとき、町の中へ出て行ってみると、ものすごく皆が苦悩を抱えていることがよく分かって、その苦悩を除くためにはどういう心の鍛錬をしたらいいかということをいろいろ考えた。そして悟りを得ることの大切さを自覚し、人間としてどういう鍛錬をすれば悩みをなくし、釈迦になることが出来るかという形で原始仏教というのが作られたわけです。それが何百年を経て中国に渡って、大乗仏教となって、日本にやってきたという形でありますから、そういう意味では原始仏教からずいぶん今日の仏教は変わってきているわけであります。いずれにしても、ブッダが最初に考えて実践した原始仏教というものを我々としてはよく勉強しなければいけないのではないかと考えます。
⑥ですが、儒教とか道教とかいう中国で発展した宗教がありますけれども、これはいわば庶民をうまく統治するための倫理規定のようなものであると捉えてもいいのではないかと考えております。

だんだん時間がなくってきましたから端折って話をしますけれども、８．の日本の宗教の特色というのは、農耕社会の典型的なものであって、村の人たち同士がお互いに助け合って和やかに平穏に過ごすということが理想であるということによって、自然というものを神であるとして敬うというような形で、神道が形成されてきたわけです。そ

れで結局、人間として、隣同士の人間は争わず、自然と共存して正しい生き方をしていけばいいんだということが中心になった世界であると考えます。

③ですが、そういう長閑な世界に仏教が飛鳥時代に渡来してきまして、そこで日本人も宗教とは一体どういうものであるかということに関しての認識が深まって、鎌倉時代にそれが花開いて日本仏教が確立したと言ってもいいでしょう。法然、親鸞という二大巨塔によって仏教が日本中に広まった。そして次に一遍上人が出てこられまして、それは法然、親鸞からずいぶん後ですが、南無阿弥陀仏を一心に唱えればそれで浄土に行けるんだという、いわゆる理屈を通り越して信じる世界というものを直感的に実践するという、そういう世界をはっきりさせられたのが一遍上人ではないかと考えます。法然、親鸞の場合は、仏教の教義とか、仏教とは一体どういうものなのかということに関する理屈といいますか、教義といいますか、道元もそうですけれども、そういうことを深くやった方ですけれども、一遍上人はそういうものを捨象して、信じるということ、信じて念じておれば極楽浄土にいけるという形になったわけです。

そういう意味においては、神道においても先ほど言いましたように、自然というものを神と考えて、自然というものを尊重し、尊崇し、そしてそれを拝むということ以上のことは考えない。つまり空の世界に近いところでやっていくという宗教ではないかと思いますので、一遍上人の仰っていることは神道の考え方と非常に近い考え方ではないかと思います。つまりやっぱり日本人の固有の考え方はそういうところにある。日本においては神道だけでなく仏教においてもそういうことだと考えまして、「Simple is best」という世界、つまり無駄なものはそぎ落としていって、最もシンプルなところで生きていくことにこそ人間の生き方の本質があると考えていいのではないかというふうに考えております。

さて、9. は何を書きましたかといいますと、宗教においては心に安心感を持つために神を信じ、心の鍛錬をするわけですけれども、自然科学的な世界では何をやってきているかといいますと、②に書きましたけれども、心の問題というのは、心理学あるいは心理療法によって解決しようという形で、心のケアというものを研究し、また実践も始めております。つまり、自然科学的な世界から人間の心をどこまでちゃんと理解し、そして安心立命するためにはどういうことを科学的にやればいいかということについて、随分研究が進んできたと考えてもいいのではないか。そしてお年寄りの方々は、介護老人施設、私もそろそろ入らないといけないかと思いますけれども、そういうところで体のケアもするけれども、心のケアも一所懸命にやるということによって、自然科学的な方法で人間の心を宗教的な安心感と同じようなところに持っていこうとしている。つまり天国に行くというところに近いところまで、心理学や自然科学的立場の人たちの

研究も近づいてきたと言えるんじゃないか。そして国の政策としてもいろんな老人介護に関する、あるいは年寄りに関するシステム、安心して老後をやっていけるようなシステムを実施しています。そして人たちはそれに乗っかって、それによって安心して老後を過ごす、そして安心してあの世へ行くというようなことが実現されてきているという事実があるわけです。

そういう意味で、現代の人々の宗教に対する関心がなくなってきているのではないか。平安・鎌倉時代から戦国時代にかけては、30 代、40 代の若さでみんな死んでいったわけです。今のように、私も 80 を過ぎておりますけども、長寿になって生きているというような時代じゃなくて、30 代、40 代の働き盛りでどんどん亡くなっていきましたから、死というものに対する恐怖心はものすごくあったに違いないわけです。それに対して今は、私のような年代になりますと、もうどうやったらうまく苦しまずに死んでいけるかというようなことを考える時代になってきたということです。そこでは宗教というよりは心理学的なアプローチによる心のケアに頼るということが増えてきて、宗教の存在理由がだんだんなくなってきているというか、小さくなってきている。現代の多くの人達は死後の世界などほとんど信じておらず、信じなくても何とかうまく死んでゆけそうだというような、そういう時代になっているわけです。そういう現代社会の中で宗教というのはどういう風になっていく必要があるのか、どうすれば本当の意味で人の心を救済することが出来るのかが問題です。心理学的、科学技術的な形で人間というものをいろいろ研究し、心のケアもやっているにも関わらず、人間は満足できないという事実は確かにあるわけです。それをどういうふうに宗教が取り上げ、人の心を癒すことができるか、救いの手を差し伸べることができるのか、そういうことについて新たに考える必要があるんじゃないかと考えているわけであります。昔むかしの鎌倉時代や江戸時代とかそういう時代は、人はどんどん亡くなっていきましたから、そういう人の心のケアとかいうのは宗教が全面的に引き受けてやっていたのに対して、今日は科学技術的、心理療法的な手法で心のケアをやる、そういう時代になってきた中で、宗教というのはどういうことをやればその存在理由を保ってゆけるのかということについて、もっと深く考えなければいけないというのが今日の状況ではないかと考えているわけで御座います。それを④、⑤に書いております。

１０. は個人における安心立命ではなくて、民族とか国家とか世界とかいうことを考えた時に、ではどういうアプローチをする必要があるのかということを少し書いておきました。いろいろな宗教がありますけれども、いずれの宗教においても人間というものについての考え方が確立している訳であります。しかし、宗教というようなイデオロギーでもって相手を打ち負かすというような、宗教を悪用したといいますか、宗教を盾にしていろんな罪悪を犯すようなことがどんどん起こってきているということについて、で

はどういうことが出来るか、どういうことをするべきか、宗教としてどういうことをする必要があるのか。あるいは自然科学、心理療法とか色々ありますけれども、それらがどういうことをする必要があるのか、ということについて考えなければならないのではないかということを書いております。

時間がないので端よりますが、いずれにしましても⑥にありますように、人間の欲望というものはどうしたら抑えられるか、相手のことを考えながら、相互依存をするためにどのような妥協や協力をすることが出来るかが大きな問題になると思います。アメリカでは最近、マインドフルネスということが言われ始めております。ご存知の方も多いと思うんですけれども、これは全くアメリカ流座禅だと思います。1 週間か 2 週間、合宿して心の鍛錬をする、無念無想になるというような合宿訓練を、UCLA（カリフォルニア州立大学）の先生が開発しました。このマインドフルネスの道場というのがアメリカで徐々に広まっておりますけれども、日本語でもマインドフルネスに関して書かれた本とか、あるいはアメリカのマインドフルネスについて書かれた本の翻訳が 3 つ 4 つ出ております。そういうことがアメリカでも行われるようになってきておりまして、心のコントロールというものをどういうふうにしたら出来るかということを頑張って実践しているわけでありますけれども、そういうこともこれからどんどんやっていくといいのではないかと存じます。個人でなく集団ということになると相互理解といったことがいっぺんに難しくなるということが問題です。

１１．ですけれども、信念について書きました。宗教を信じるというのは、信念を持っているからこそ信じるということが起こっているわけです。違う宗教の違う信念を持った人達、あるいは違う信念を持った二つの民族、国というものが、どうしたら調和できるのかということが大問題です。異なった信念同士が対立するという場合を考えますと、一番簡単な場合は相手を屈服させるということです。それは戦争によってやるとか酷いことが今日でも行われている。もう一つの場合は信念を持っている民族とか人が相手を説得できないときに、お互いが並列して存在するという、いい言葉でいえば共存ということに収まればいいんですけれども、それが人間の欲望とかそういうことからして、どうしてもその並列の状況で持続するのは生ぬるいというのか、相手をやっつけないと気が済まないというのか、そういうことがあるので、それを何とか止めさせて最低限共存する、相手にちょっかいを入れないというようなことが出来ないかということがこの場合の問題です。それを解決する方法はなかなかないわけです。あれば今の地球世界は非常に平穏なところにいっているに違いないですね。そういう妥協が得られないときにどうすればいいのかと言うと話し合うしかないわけです。しかし違う信念をもった人同士、あるいは二つの国同士が、話し合いをすることによって相手を認め共存することができるかどうか。これは簡単ではありません。異なった信念を持ってい

る者同士は信念を曲げられないから、合意に至ることはなかなかできないわけです。

唯一できることはお互いに話し合いをすることによって、お互いの立場をある意味で棚上げして、ドイツ語でいえばアウフヘーベンして、その上の世界を見つけ出す。つまり自分たちの信念を包含した一つ上の世界をはっきりさせて、そこに向って頑張るということであれば、二つの世界が共存しうるのではないかというわけです。つまり、一つの宗教の教義ともう一つの宗教の教義のそれぞれが対立しているかもしれないけども、対立している教義をアウフヘーベンすることによって、もう一つ上の本当の理想世界、ダンテの神曲でいえば天上の世界ですね、そういうものを何とか上手く見つけ出す方法はないかということにかかっている。それがうまく見つかればお互いはその世界を了承してその世界へ向けて努力をすることができる。しかしながらそれは難しいことであります。富士山に登る時に、東側から登るか、北側から登るか、西側から登るかということによって、てっぺんに到達する努力をする。しかし、てっぺんとはいっても外輪山ですから、理想の点に非常に近づいたんだけれども、さらに上の共通の一点、本当の理想の境地を一緒に見つけねばならない。仏教でいえば空の境地の世界でしょうか。そういう空の世界の境地とは一体どういうものであるかということを、国同士、民族同士、人同士が心を開いて議論をすることによって見つけ出して、そこに向けてお互いに努力をするということが出来ないか。そういう努力が出来ない限りは、地球世界からなかなか紛争をなくすことが出来ないということになるわけであります。

最後の12．にはそういうことを書いておきました。結局それは異文化の世界の人たちが心を開いて徹底的に議論をするしかないのではないか。そして新しい理想の世界を見つけ出すことを頑張ってやるしかないのではないかと考えています。つまり、戦争などによって相手を屈服させるというようなことではなくて、話し合いによって理想世界を見つけ出していく。これはこれからの宗教のもっとも大切な目標であるでしょうし、心理学や脳科学、自然科学の人たちもそういう方向を目指して努力をしなければなりません。しかしあまりやりすぎると脳をコントロールすることにつながってゆく危険性がありますから、そこは難しいんですが、そういうことをすることによって、それぞれの民族や国家が考えているそれぞれの理想の世界を、もっと世界レベルで、宇宙レベルで考えて到達しなければならない理想の世界の方に考え方を移していくことによって、狭い地球上でひしめき合っている人類というものを、いざこざのない世界に持っていく必要があります。そのために、宗教、そしてまた自然科学、あるいは工学というものがお互いにもっと対話し相互理解に至る努力をする必要があるのではないかと考えているところであります。

随分荒っぽい話になりましたけども、だいぶ時間過ぎましたので、ここで終わらせてい

ただきます。レジュメのほうをよく読んでいただければありがたく存じます。ありがとうございました。

以上